

News Letter

2014.3 第3号

Educational and Academic Support Organization

教育研究支援機構が変わります

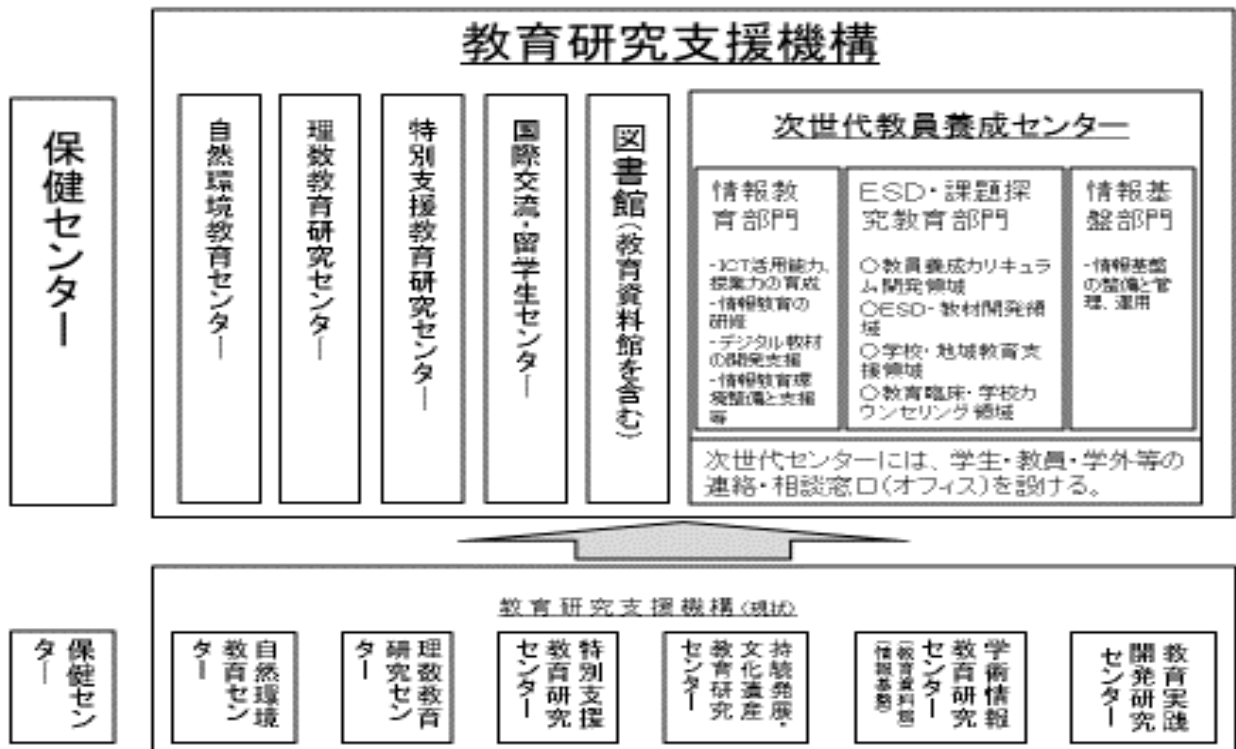
教育研究支援機構長・学長 長 友 恒 人



昨年7月に次世代教員養成センター（略称：次世代センター）が発足しました。次世代センターは平成26年4月から情報教育部門、ESD・課題探究教育部門、情報基盤部門の3部門構成で新しいスタートを切ります。これに伴って、学術情報教育研究センター情報館は次世代センター情報館となり、学術情報教育研究センター図書館は大学附属図書館（情報館を含む）となります。教育実践開発研究センターは廃止されて、その業務は発展的に次世代センターのESD・課題探究部門が引き継ぐこととなります。また、持続発展・文化遺産教育研究センターのうち、人権・市民性教育部門と文化遺産教育研究部門の業務は同じく次世代センターESD・課題探究部門が引き継ぎ、文化多様性教育研究部門は新しく国際交流留学センターとして改組されることとなります。

このような大幅なセンターの改編に伴って、教育研究支援機構も下図のように大きく組織替えすることとなりました。教育研究支援機構の各センターは文字通り、本学の教育研究を支援しサポートする組織として発展します。今まで以上に各センターを活用して学習に、研究に役立てていただきたいと思います。

教育研究支援機構の改編



【学術情報教育研究センター】

1. 第2期工事（図書館）

図書館は、平成23年度の第1期工事に引き続き、平成25年度に第2期工事として増築・改修工事が行われました。増築部分として3階建て総面積約980㎡が増設され、1階部分には、学生同士が主体的、能動的な学修（アクティブ・ラーニング）を行う自由で快適な「知的空間」として、「ラーニング・commons」を設置するとともに、レポートや卒業論文の作成などの指導・支援を目的としたライティング・サポートエリアのほか、模擬授業や演習等が可能な演習エリアを併設しています。さらに1階にはグループ学習室（2室）、展示コーナーなどがあります。2階部分には、教科書コーナーや貴重書庫などのエリアが設置され、次世代教員の養成に向けた教育環境が整備されました。また、3階部分には、国立大学法人施設整備補助金で新たに電動集密書架を設置する予定です。

改修部分については、リフレッシュスペースやえほんのひろば、グループ学習室、AVルームなどが整備され、快適な空間に生まれ変わりました。このほか、大学改革強化推進補助金により、ICTによる実践的教育力や指導力・課題探求教育力の向上を図るためディスカッションテーブルや電子黒板、タブレット、プロジェクター、教材作成編集機材などが整備されました。今後は、学生等の利用者がこれらの施設や設備を有効活用し、利用促進されることを願うばかりです。

2. 学術情報教育研究センター情報システムの整備

平成25年度には学術情報教育研究センター情報システムを更新し、今後の教育研究の発展や環境に配慮した情報システムを構築しました。更新したシステムは基幹ネットワーク機器、基盤サービスを提供するサーバ群、情報館授業システム、学生が教育・研究に利用する共同利用パソコンなど多岐にわたります。このシステム更新により高い情報セキュリティや障害に強い情報システムを実現し、大学の情報基盤の安定的な運用が可能となっています。情報館の教室には共同利用パソコンを始め電子黒板、プロジェクター等の最新のICT機器が整備され、

これらの機器を利用する授業が安定して行えるシステムとなりました。また、利用者に対しては、ファイルサーバやメールサーバの各利用者のデータ保存容量が増加するなど学生・教職員に対するサービスの充実が図られています。



3. 企画展（教育資料館）

平成25年度は、教育資料館の利用促進を図るため企画展示等を学内から募集しました。また、これらの取り組みを支援するためボランティア学生を募集し、企画や広報活動、準備作業など幅広く支援を行っていただきました。この甲斐あって例年以上の2300名余りの来館者が教育資料館を訪れ大いに賑わいました。企画展示等にご協力をいただきました教職員や学生等の皆さんにお礼を申し上げます。課題として、学外者に比べて学内の教職員や学生の来館者数が少なく、ときには教育資料館の場所さえ理解されていないなど、学内での周知が不十分であったことを痛感しています。今後は、増加に向けた取り組みとして周知方法を工夫する必要があると感じた次第です。

【教育実践開発研究センター】

本センターでは、教育に係る諸問題に適切に対処できる実践力を有する教育者養成に寄与することを任務とし、様々な事業を実施しています。ここでは、そのうち2つの取組みをご紹介します。

1. 東日本大震災教育復興支援ボランティア

実践開発研究センターでは、3年前の東日本大震災以来、宮城教育大学との連携によって、宮城県内の小中学校に合計48名の教育復興支援ボランティアを派遣してきました。この3月にも第10次派遣の5名が気仙沼の自主学習支援から帰ってきたばかりです。

このことに関連して、平成26年1月8日に「東北の子ども達は今―スクールカウンセラーとしての活動の実際―」という公開講演会を行いました。講師は現在岩手県巡回型スクールカウンセラーとして勤めておられる渡部友晴先生でした。教育臨床研究部門の市来准教授とは、3年前の震災後5月に岩手県スクールカウンセラーとして同じチームに派遣された時からのご縁です。講演の中では、陸前高田市の被害状況、学校や地域の様子、実際の小学校でのスクールカウンセリング活動などについてお話をして下さいました。

渡部先生は、被害にあった子どもたちに起こり得るいくつかの心の働きを「ねずみに耳をかじられたドラえもん」に準えて説明されました。東日本大震災から3年がたった今、いわゆるトラウマ反応は落ち着いてきている一方で、家庭内の生活ストレスはますます増加しているのだそうです。あの時、親や兄弟、親戚をなくした子どもたちの中にも、少し言葉にすることで、心の中に収めることができるようになってきた子、まだそのことに触れようとせず、何もなかったように過ごしている子など「喪失からの回復」の作業は人それぞれです。子どもたちが表現できる機会を今後も保障し、長期的な視点で子どもたちが成長していく力を信じることの大切さを語られました。

講演後は、上記の学生ボランティアとして宮城県伊具郡丸森町に派遣された大学院2回生朝田真琴さんと



渡部氏の講演&東北教育復興支援報告会

4回生の白石卓也君に支援体験を話してもらいました。今後もセンターでは、東北で起こっていることに心を寄せながら、奈良の地で自分たちにできる様々なアイデアを出し合いながら考えていきたいと思っています。

2. 附属学校園におけるスクール（キンダー） カウンセリング

教育臨床部門では、お子さんの健やかな成長を支援する一端を担うべく、附属学校園のお子さんや保護者の方へのカウンセリングを行っています。

平成21年11月に、中学校に週1日スクールカウンセラーが配置されたことに始まり、その後小学校、幼稚園においてもカウンセリング活動が行われるようになりました。本年度（2月まで）における児童・生徒、保護者、教員対象のカウンセリング延件数は1,431件で、年々増加してきています。

スクールカウンセラーの業務は以下のようなものです。児童・生徒の個別カウンセリング、発達検査・心理検査の実施／保護者のカウンセリング、子育て支援／教職員との連携、教職員のメンタルヘルスケア／関係機関との連携（医療機関への紹介、子育て相談課・子ども家庭相談センター・保健センター・司法機関との連携など）／保護者・教職員対象の研修会の実施／児童・生徒へのメンタルヘルスについての予防的介入としての心理教育／ケース会議等への参加／緊急時のこころのケア、危機介入 など

学校におけるスクールカウンセラーの役割は、個別に相談をするだけでなく、お子さんの健やかな成長を支えるために必要な人や関係機関と、合理的に機能的に「つなぐ」ことにあります。したがって、個別の相談を受けた後には、守秘義務に反しないように配慮しながら、担任をはじめとした教員と話し、関係者と協議し、適切な支援の方法を探っていきます。附属学校園は、お子さんの成長を最長12年間見守ることができます。その利点を活かし、レトロスペクティブにお子さんの成長を振り返るために過去の担任の先生のお話を聴きに伺うこともあります。また、保護者の方は子育て等に悩み、不安を感じていることも多いので、まず保護者を支えることも重要です。

私どもの目指すスクールカウンセリング活動は、次世代を担う、まさに「宝」であるお子さんの心の健やかな成長に対して、きめ細やかな配慮を提供するために、丁寧な相談を行い、「つなぐ」役割を担うものであると考えています。

【持続発展・文化遺産教育研究センター】

持続可能な発展（開発）及び文化遺産を基軸にした教育と研究に従事する本センターは、各部門の横のつながりを重視しつつ多岐にわたる活動に積極的かつ継続的に取り組むなかで、その成果を着実に上げております。今年度の活動内容の一部を以下に紹介することで、次年度への各部門の継続的で発展性のある取り組みへの視野を提示します。

1. 人権・市民性教育研究部門

本部門は具体的な活動として、人権意識の醸成や自尊感情の形成につながるワークショップの開催、人権や市民性教育に関するフォーラムの実施などにより、実践的な学習機会の提供に取り組んでいます。今年度の主な活動としては以下の通りです。

- *「子ども・若者支援専門職養成に関する総合的研究」（科研費基盤研究 B プロジェクト）
- *「教育人権アプローチ特講」として奈良市立春日中学校夜間学級見学（6月及び11月）
- *子どもの暴力防止プログラム（CAP 西山とトレーナー3名によるワークショップ）
- *性的少数者に関する特別講義：LGBT「当事者の語りを聞く」
- *講演会「ことばの力と教育—母語という礎」（文化多様性教育研究部門との共催）

2. 文化遺産教育研究部門

本部門は伝統文化や文化財・世界遺産の教材開発、教授法・学習法の開発を行い、教科及び教科横断的内容を豊かにする研究を実践的に行うとともに、ユネスコなどの国際機関と連携し、ユネスコスクールに関する取り組みを通して、持続発展教育を推進しています。

- *ASPUnivNet として、研修会と ESD ウォーキングをともに三回開催しました。
- *奈良 ASP ネットワークの事務局として研修会や交流事業を積極的に行うとともに、
- *特色ある取り組みとして、奈良 ASP ネットワーク ESD 子どもキャンプを開催しました。
- *ユネスコスクールへの支援活動として9校の加盟支援を行いました。

*陸前高田市文化遺産調査団として引き続き本調査を行い報告書を作成しました。

3. 文化多様性教育研究部門

本部門では、留学生の受入及び派遣を基盤として、文化多様性教育の理論的・実践的研究と教育を推進し、持続発展教育に携わるとともに、提携大学との交流実績を踏まえ、アジアに視点を置いた教育・研究に関するプロジェクトの企画・調整を行っています。

- *受入留学生の資質に合ったプログラムの維持と改善を引き続き行いました。
- *国費及び協定校留学生受入向け「来日前プレキット」の改善を行いました。
- *地域及び附属小中校の国際交流活性化への貢献を目指す取り組みを行いました。
- *『『国際的な視点に立った教員』の養成のための異文化交流の活性化プロジェクト』
- *講演会「ことばの力と教育—母語という礎」（人権・市民性教育研究部門との共催）

上記*印の活動及びその他の取り組みの詳細については、本センターの過去三年間の活動を振り返った「持続発展・文化遺産教育研究センター活動報告書」を参照して頂ければ幸いです。

【特別支援教育研究センター】

1. 活動概要

特別支援教育に関わる理論と実践に関する教育研究を総合的に行い、特別支援教育を担う人材の養成に寄与するとともに、地域における児童生徒等の教育的ニーズに応じた特別支援教育推進に貢献します。発達支援部門（発達相談、専門プログラム実践、実践研究）と教育実践支援部門（教育委員会や学校等と連携しての教育相談、共同研究、人材養成）から構成されており、スタッフは、児童精神科医、臨床心理士、臨床発達心理士、作業療法士などの専門家集団です。

これまで文部科学省概算要求プロジェクトとして、特別支援教育高度実践モデルの開発、ライフサイクルに応じた地域ネットワークの構築などを行ってきましましたが、平成25年度からは「地域連携に基づく特別支援教育人材養成モデル推進事業－ICT活用による人材と教材のネットワークの構築－」として、ICT教材を開発・活用しながら、一層地域の先生方と連携して人材養成できるネットワーク作りに取り組んでいます。

2. 平成25年度研修事業…26年度事業は、順次HP

(<http://nara-edu-csne.org/>) にアップ予定。

【特別支援教育公開講座】（一般の方・支援者対象）

- ①10月5日（土）「子どもの想いを大切にするこゝの意味」 前川久男氏（筑波大学名誉教授）
京都教育大学主催。双方向システムにて開催。
- ②10月26日（土）「子育て支援からの自閉症スペクトラム支援～地域での一貫した支援体制がなぜ必要なのか～」 安達潤氏（北海道教育大学旭川校教授）
- ③11月30日（土）「子どもと家族に寄り添う支援～東日本大震災、気仙沼の取り組みから学ぶ～」
シンポジスト：現地教員・保健師さんたち、大久保千恵氏（本学特任講師）、コーディネーター：古川恵美氏（畿央大学）、岩坂英巳

【特別支援教育セミナー】（教員・支援者対象）

- ① 8月20日（火）「支援教材にみる特別支援教育」
「読み書きの苦手な児童の読みを支援するDAISYの活用事例」 香芝市立下田小学校教諭 芳倉優子氏
「様々な読み書き支援ツールの活用について」
香芝市立下田小学校教諭 村上賢司氏
「肢体不自由児への様々な支援教材」
奈良県立明日香養護学校教諭 村瀬直樹氏
「自閉圏・知的障害の生徒に対する教材による支

援」 奈良県立西和養護学校教諭 山口武志氏
「ICTを用いた教材活用のネットワーク構築」
本学研究員 田中宏季

- ② 2月23日（日）「英語につまずく子どもたち～特別支援教育の視点を取り入れた英語学習～」 大阪市立長吉中学校 三木さゆり氏
【PT・TT リーダー養成講座】

- ① ペアレントトレーニング（PT）指導者養成講座 8月10・11日（土日） 講師：井上雅彦氏（鳥取大学）、岩坂、大西貴子（本学特任准教授）
- ② ティチャートレーニンク（TT）指導者養成講座 8月3日（土） 講師：岩坂、現場で実践されている先生方

3. 平成26年度相談事業…決まり次第HPアップ

【専門プログラム】

- ① ソーシャルスキルトレーニング（土曜SST くらぶ）
月1回土曜日午前中の全10回実施予定
- ② ペアレントトレーニング
火曜日午前中の全10回実施予定
- ③ ティチャートレーニンク 幼児版
木曜日夕方の全6回実施予定

【個別相談（発達相談・教育相談）】（予約制）



（11月30日公開シンポジウム）

【理数教育研究センター】

理数教育研究センターでは、理数に強い教員の養成を目指して、特別教育プログラム「新理数」や公教育現場・地域との連携を中心に多くの事業を企画・立案し、実施・運営しています。「新理数」では、最終段階でスーパー・サイエンス・ティーチャー（SST）やSST ベーシックといった本学独自の認定が学長名で行われます。学部改組に合わせて、SST コース、SST ベーシックコースのカリキュラム整備が行われました。

一年間の活動の様子のごく一部ですが、紙面の許す範囲で紹介します。

1. ウィンター・スクール 2013 イン曾爾

平成 25 年 3 月 8 日に「ウィンター・スクー2013 イン曾爾」を開催しました。曾爾中学校において、新理数 1・2 回生が中心となって、理科・数学（算数）実験を行いました。曾爾中学校の生徒さん達に理科・数学（算数）を楽しく学んでもらえるよう、工夫を凝らしました。



今回は特に家庭科を専攻する有志学生・教員の指導下、防災教育の一環として、災害時にも温かいご飯が



炊ける工夫の実習を全校生徒と行いました。

2. ケンタッキー州大学連合との国際交流

平成 25 年 6 月 5 日、理数科教育プログラムに参加する学生・院生らが中心になって、ケンタッキー州大学連合の所属教員、学生ら総勢 20 名を招いて学生交流会を実施しました。外国人学生との交流を



通じて、学生が日本の文化や大学での学びを伝えることの難しさや面白さを実践的に体感することは、教員養成において重視される実践力のみならず、コミュニケーション力、国際感覚を養うことができる貴重な機会です。学内外で多くの仲間と交流の輪を広げることは、必ず将来の財産になります。大学のグローバル化の流れは加速しており、学生交流を通じて、教員養成に根ざした大学全体の国際化の発展が期待されています。



3. S S T 認定証授与式

9 月 30 日に、S S T 認定証授与式を行いました。プ



ロジェクト教員が見守る中、長友恒人学長より SST 認定書が授与されました。

（本センターは学内外に広く開かれています。センター窓口は、電話：0742-27-9333、e-mail: nesm@nara-edu.ac.jp です。）

【自然環境教育センター】

1. 人事

平成 25 年度の自然環境教育センターのニュースとしては、専任准教授辻野亮氏の着任でしょう。この 1 年一緒に活動した経験から、これからのセンターを背負って立つに相応しい長身の青年であることは確かです。期待に応えてくれることを祈っています。現センター長の鳥居はこの春に退職であることから、後任には運営委員会の推薦と学長の判断により石田正樹教授が就任することになりました。なお、鳥居は特任として残ることになっています。

2. 公開講座

自然環境教育センターの課題は一昨年 9 月に起きた台風 12 号による深層崩壊によって奥吉野実習林の一部の機能が停止していることです。そのため、公開講座「親子で楽しむ夏の森」は 24 年度には十津川村旧五百瀬小学校を使わせてもらって、実施せざるをえませんでした。しかし、今年度は土石流の流れた赤谷も国交省の流路工事により、河川の状況も安定したことから、実習林で実施することができました。

宿泊は実習林でしたが、川遊びや川での自然観察は実習林周辺では見送らざるを得ず、7km ほど離れた大塔町中井傍示の永盛小学校跡地を休憩所にお借りして、そこから河原まで歩き、活動の場としました。そこでは魚やトンボを追い、水棲昆虫を探し、大いに楽しんでもらいました。しかし、河原まで歩く距離が短いことと、狭い山道であることから、自然観察の材料に乏しいことは否めません。実習林でも夜間に昆虫採集をしたのですが、土砂が堆積した河原の脇では昆虫採集も思うに任せませんでした。やはり実習林の登山道を登り、昆虫採集や植物観察することに意義があったのでしょうか。その実現には相当な年月が必要ではないでしょうか。それでもリピーターの参加者からは、やっぱり奥吉野実習林でのキャンプが楽しいと声が多かったようです。



奈良実習園では公開講座「米作り教室」だけでなく、留学生へも米作りの体験を提供し、好評を得ました。米作りでは「田植え」、「稲刈り」、「餅つき」がセットですが、留学生は来日した時期に合わせて、先に稲刈りをしてもらい、田植えをして帰国するなど順序は変わっていますが、田植えから餅つきまで活動してもらっています。また、公開講座「畑で汗を流しませんか」も好評で、参加者は予定以上に実習園に通って、各種の作物を収穫してくれました。ただ、今年度は丹精込めて収穫間近になったトウモロコシやスイカをアライグマに食べられてしまうということがありました。奈良市農林課と猟友会の協力で 3 頭は捕獲したのですが、自動撮影装置には捕獲檻の周囲に 5 頭ものアライグマが写っていました。来年度は最初から対策を立てて開講しなければならないでしょう。



3. アウトドアキャンパス

本学学生のほとんどは、街中で生まれ育って奈良教育大学で学んでいるものと思われます。卒業して教員となった時に、山間部の僻地に赴任する可能性があり、彼らはしばしば戸惑いを感じるでしょう。山間僻地での教員生活をイメージする目的で、五條市森林組合職員(大阪市内に生まれ育った本学自然誌専修の卒業生)を招いて講習会を行うとともに、山間地の視察を行いました。都会から山間僻地に移住して生活・仕事をしてゆくうえで自身が感じた戸惑いや困難を本学学生らに紹介してもらったことで、学生らが持っていた不安を取り除き、おぼろげながらイメージを与えることができたようです。今後、この試みをどのように継続してゆかが課題として挙げられます。

4. 奥吉野実習林の復旧

今年度の課題でした奥吉野実習林の水源はなんとか目処がたったようです。対岸にある滝から水を引くことができそうです。平成 8 年度の大塔寮の建て替え前はやはり対岸の森林管理事務所管内から水を引かせていただいていたのですが、水源は異なるものの、同じような形態になりそうです。平成 26 年度の授業までにはなんとか改修できればと考えています。

各センターのホームページ一覧

各センターの活動については、下記のホームページをご覧ください。

○学術情報教育研究センター

http://www.nara-edu.ac.jp/13_CLAI.htm

○教育実践開発研究センター

<http://www.nara-edu.ac.jp/CERT/homepage.htm>

○持続発展・文化遺産教育研究センター

http://www.nara-edu.ac.jp/20_jizokuhatten_bunkaisan.htm

○特別支援教育研究センター

<http://nara-edu-csne.org/web/index.php>

○理数教育研究センター

<http://nesm.nara-edu.ac.jp/>

○自然環境教育センター

<http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/index.htm>



奈良の地でー 学び創造、 学び発信

奈良教育大学

〒630-8528 奈良市高畑町

奈良教育大学総務企画課

TEL 0742-27-9105

E-Mail kikaku-2@nara-edu.ac.jp

URL <http://www.nara-edu.ac.jp/>